

## 学習者を取り巻く状況変化と国語科教育

——課題克服の手だてを求めて——

田中宏幸

### 一、はじめに

「学習者を取り巻く状況変化と国語科教育」という研究主題は、第四十一回協議会のそれと同じものである。二年連続して同じ研究主題が設定されるところに、この問題の緊要性がうかがえよう。ここ数年の間に、パソコン、インターネット、携帯電話などの情報媒体が急速に普及し、黙ってメールのやりとりをしている高校生が増えてきた。授業中の私語が少なくなったと喜んでいると、実は隠れてメールを打っていたということもよくあることである。こうした仲間内だけの言葉のやりとりが普及するにつれて、言葉の質そのものが変化しつつあるように思われる。さらに、中・高校生の資質にも変化が生じているようである。言葉が通じなくなつたと言われる深刻な状況の中で、これからの中・高校の国語科教育はどうあられよいのだろうか。これが本研究協議会の中心主題である。

前回の協議会では、主として教師側の問題が取り上げられた。司会の余郷裕次氏は、「教師（大人）が学習者（子ども）に語りかけなくなつたことが、学習者（子ども）を取り巻く状況の大きな変化であり問題点である」として、教師自身が自己変革し、「自分の生きていることから発する言葉への内的根拠」を語るべきだとまとめている。（『国語教育研究』第四十四号、一二二～一二六頁）

さて今年度は、その協議内容をさらに深化させることが課題であった。問題は、学習者の変化の実態をどう捉えるのか、また、その変化にいかに対応していくのかということである。

この二本の柱について、本研究協議会の登壇者は、どう考えていたか。対照的な意見が出された点を中心に、三人の実践報告と提案を捉えなおしてみたい。

## 二、登壇者の問題意識と提案

(一) マンガやインターネットによる授業の活性化

黒瀬直美氏（広島県立安西高等学校）は、昨今の学習者の変化を次のように捉える。

- ①聞き取る能力の低下
- ②抽象的な概念を操作する力の低下
- ③論理的な作文能力の低下
- ④パブリックな場における話す能力の低下
- ⑤人間関係を形成する力の低下

だが、その反面、ギャグを連発したり、映像から情報を感覚的に読み取ったりすることには長けていとも言える。総じて、一対一の関係における即時的・感覚的な反応には優れたものを持っているが、一対多の関係における持続的・論理的な思考が十分に行われなくなっていると捉えるのである。

こうした状況に対して、黒瀬氏は、マンガやインターネットを活用することによって授業の活性化を図ろうとする。例えば、マンガプリントを配布したり、マンガを描いたボードを掲示したりすることによって、教材に関心をもたせ、そこを突破口として、言葉で深く考えたり、伝えたいという意欲を持って表現したりする「場」を形成しようとするのである。

(二) グループ発表による文学の授業づくり

小山秀樹氏（大阪府立今宮高等学校）は、学習者の日常の中にかりとした会話がなくなっていると捉える。友人との会話さえ断片的な単語のやりとりで済まされ、複数の人間と共に考えるという「場」が失われているというのである。

そこで小山氏は、グループ発表の授業を組織することに力を注いでいく。教材としては、学習者と年齢的に近い十八歳の人物を主人公に設定した現代文学（鷲沢萌「卒業」、宮本輝「途中下車」、中上健次「断層」）を取りあげる。学習者たちは、この三編のなかから一編を担当し、課題を設定して話し合い、読み取った内容を発表資料に仕上げていく。この学習過程を経験することによって、自らの読みを表現していく充実感と、他者と意見を交わす楽しみを実感させようというのである。

(三) グループ発表による古典の授業づくり

山本伸子氏（香川県立土庄高等学校）は、学習習慣や読書習慣の不足が問題だと捉える。教師の指示がなければ何もしようとしないう習者や、板書を丸写しにするだけの学習者が増えているというのである。

そこで山本氏は、古典の授業に「調べ学習」を取り入れ、「みんなが旅する奥の細道」という単元学習に取り組ませる。学習者たちは、班ごとに、担当した章段を口語訳し、その土地の紹介や俳句の鑑賞、難語句・故事の説明、独自のテーマに関する探究などを資料にまとめて、発表する。この学習を通して、予習の仕方や調べ方を

学ばせ、協力して作業に取り組む姿勢を作ろうというのである。

### 三、研究協議での論点

この三名の提案を受けて、熱心な協議が展開されたが、その中から教材観と指導観に関わる三つの問題に絞って、考察を加えたい。

#### (一) 教材選択の必然性

まず論議されたのは、「なぜその教材を選んだのか」という問題である。

教材選択は、理想を言えば、学習者の内的必然性を伴ったものでありたい。それが叶わないまでも、学習者の心に切り結ぶ力のあるものでありたい。そういう考え方に立てば、今回の教材群はどのように評価されるのかという問いかけである。これは、それぞれの実践者が取り上げた教材の適否を問題視しているわけではない。目の前の学習者たちにとって、この教材こそ価値あるものだという判断がなされたはずだから、その基になっているものを聞かせてほしいという要望である。

これに対して、小山氏は「自分と重ねて読むこと」を重視したと答える。話し合いを通じて「作品研究を深めること」以上に、「自分の状況を見つめること」を可能にする教材だと評価するのである。「教材を読むこと」よりも「自己を読むこと」を重視した考え方だと言えようか。学習者の状況に近い教材を用いることによって、学習の成立を図るとともに、自己内対話を豊かにさせようとする考え

方である。

一方、山本氏は、「古典を学ぶときに、最初から学習者側に内的必然性があるとは思えない。言語文化と出会う機会を与えられ、学びながらその魅力を知っていくということがあってよいではないか。その場をいかに作るかが国語科教育の課題だ」と答える。日常生活と異質のものであっても、長い年月を経た純度の高い表現を提示するのが教師の責任であり、その異質のものとの出会いの成立を図るべきだという考え方である。

この対照的な二つの反応は、教材選択の際に常に意識しておくべき問題を提起していると言える。また、古典を学ぶ意義をどこに見出すかという問題にもつながるものである。若い教員の中には、「無理をして古典を解釈しなくても良いではないか」という意見を持つ者さえ現れている。こうした状況の中で、なぜその教材を取り上げるのか。その教材でどういう目標が達成されるのか。その教材は、学習者自身が言葉と格闘し、新しいものの見方や考え方を獲得していくに足るものなのか。状況を鋭く捉え直した学習者観と学習者の現状に対峙しうる教材観とが明確にされねばならない。教科書に採録されているからという理由だけでは、学習者の心に届く「学習材」とはならない。今改めて、私たちの教材観が問われているのである。

#### (二) 映像教材の活用

第二は、「映像教材を活用した授業はどこへ向かうのか」という問題である。

誰が前に立とうと自分とは関係ないと言わんばかりの態度を取る学習者たちをひきつけるには、マンガや劇画を活用しなければならぬというさしせまった状況がある。したがって、たとえ感覚的な一時の反応であれ教材に関心を示してくれさえすれば、授業をスタートさせることができるのだから、大いに映像教材を活用すべきである、という考え方が一方にある。例えば、黒瀬氏は、「たとえマンガを通じてであっても、それを契機として古典に出会うことができるのなら、そこから先はその作品に登場する人間の魅力に惹かれて、学習者たちは考え始めるものだ」と語る。単調な日常生活やロールプレイングゲームのヴァーチャルな疑似空間が世界のすべてであるかのように思ってしまう若者達を、奥深い古典の世界に引きこむためには、彼らが親しんでいる媒体を利用することが必要だと考えるのである。

この考え方に対しては、「その必要性は認めるが、言語の指導としてはいつたどこへ向かうのか」という問いが対置されることになる。斬新な取り組みによって、言語抵抗を軽減させたり、教材に関心を持たせたりすることができたとしても、その次はどのように学習が深まっていくのかという問いかけである。

映像と言語とは脳の働きかたが異なるのだと聞いたこともある。映像で理解したり表現したりすること、言語で理解したり表現したりすることとの間には、質的な差があるろう。この点をどう考えていけばよいのだろうか。かつて大村はま先生が、中学生を対象として古典指導を展開したとき、傍注式プリントを用意して、できるだけ原文そのもので読ませようとなさったことがあったが、こうした

手引きはもはや通用しないのだろうか、という思いも頭の中をよぎっていく。動機づけとして映像を活用するというのは分かるが、それはあくまでも動機づけであって、本質的な学習内容は別のところにあるということになりはしないか、という思いを禁じ得ないのである。

それとも、国語科の目標そのものを見直さなくてはならぬという時代を迎えているのだろうか。最近では「メディア・リテラシーの授業開発」も国語科の課題として取り上げられるようになってきた。メディアの活用と国語科教育の在り方について論議を深めることが求められている。

### (三) 共同学習における指導者の役割

第三は、「共同学習における指導者の役割」に関する検討である。共同学習を始めるには、ともかく時間がかかる。とりわけ初期の段階では、学習者たちも、方法と内容の両面において進むべき道を見失うことが多い。こういう段階にあつて、指導者がどういう手引きを与え、いかなる助言をしていくかが問題である。学習が軌道に乗って、班の発表が始まり、質問や対立意見が出るようになれば、授業はそこから一挙に活性化していくが、そういう発言を待つだけでは、偶発性に依存した授業ということになってしまふだろう。自主的な学習に取り組む場を作ること、効率的に作業を進め学習の充実を図ることを、どうしても両立させなければならぬ。

また、中期の段階における指導者の役割も重要である。山本氏も「心情の理解を深めたり、発表の仕方を向上させたりする点につい

ては、課題が残った」と総括していたが、活動することを目的とするのではなく、内容を理解することを目的とするならば、各班ごとに具体的な課題を提示して、読み深めを求めることも必要となろう。そのときどのような課題が適切か、引き続き研究を重ねる必要がある。

さらに、後期の発表の段階にあつては、いかなる発表スタイルを選択するかということも大切な問題である。表現形式が異なれば、学習内容も異なってくる。内容が形式を規定するように、形式が内容を規定することにも思いを致さなければならぬ。そのためにも、初期の段階で、どのような表現形式を取るのかを学習者に自覚させておく必要がある。そして、指導者は自らその表現形式に挑戦しておかねばならない。そこから割り出される表現上の課題が明確になつておれば、学習者の心に沿った助言が可能となるだろう。

#### 四、おわりに

今回の三人の提案は、いずれも「いかにして学習者の心に届く授業を構築していくか」という高い志に支えられた継続的な実践から生み出されたものであつた。その実践の重みがあるからこそ、研究協議において出された質問や意見も、実践の背後にあるものに迫るうとする本質的なものが多かつた。にもかかわらず、司会者の力不足で十分にかみ合わせることができず、課題克服の手だてを説明するところまでは進みえなかつた。引き続き来年度への課題としたい。それにしても、昨今の状況の激しい変化には驚かされる。政治・

経済・文化いずれをとつても、どういう方向へ進んでいくのか、全く予想も付かない。大人でさえ翻弄されるこの変化の激しさに、若き学習者たちはどのように対応していくのだろうか。不易のものを見据えておく必要性を今ほど痛感するときはない。その不易のものを明確にするためにも、来年度はできれば、中・高・大を見通した国語科教育の課題について協議を深めたい。

(フートルダム清心女子大学)